

高砂人形

—たかさごにぎょう—

もうすぐ九月。九月九日は重陽の節句です。不老長寿を願う重陽の節句にあわせて、白髪姿の高砂人形が飾ってあるのを見ることがあります。共白髪の老夫婦で、尉は手に熊手を持ち、姥は手に箒を持つ。長寿を祝うお人形・高砂人形とはどんな人形なのか。調べてみました。

節句人形

素村なギモン



上段) 高砂人形 (撮影協力: 人形の東玉)
下段) 嵯峨人形 高砂
(京都国立博物館 入江波光コレクション)
出典: ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>)

長寿と夫婦円満の縁起物

白髪姿の尉(おじいさん)と姥(おばあさん)をあらわした高砂人形は、相生の松伝説に出てくる老夫婦を人形であらわしたものだ。

相生の松とは、雄松の幹と、雌松の幹が、途中で合わさった状態の松の木を指す。二本の松の木が一本に見えることが、共に年を経ることや夫婦の契りの深さにたとえられる。

この状態の松は珍しい植生であるものの自然に発生するもので、日本各地に実際に点在している。そのなかでも兵庫県高砂市の高砂神社に実在する

相生の松が有名だ。

高砂神社に伝わる相生の松伝説は次のようなものだ。高砂神社の創建からまもない頃、境内に相生の松が生え出た。一本の根から雌雄の幹が左右に分かれていたため、これを見た者は神木霊松と称えた。ある日、尉と姥に姿を変えたイザナギ・イザナミの二神があらわれ「我は今より神霊をこの木に宿し、世に夫婦の道を示さん」と告げた。このことから人々はこの松を相生の霊松と呼ぶようになった。

結納品として高砂人形を贈る

この相生の松伝説を元に作られた謡曲が「高砂」である(謡曲とは能の詞章のことを指す)。「高砂」では、九州は阿蘇にある阿蘇宮の神主・友成が旅に出た際に、旅の途中の高砂の浦で、松の木陰を清める老夫婦に出会う。そこで相生の松の謂れを尋ねると、老夫婦は自分達こそ相生の松の精だと明かし、姿を消した。友成が住吉に行くと住吉明神が現れ、颯爽と舞を舞い千秋万歳を祝うという内容になっている。このような伝説から、松の木の精である尉と姥は夫婦和合の象徴とされ、謡曲「高砂」は婚礼の席でうたわれることが多くなった。

相生の松伝説や謡曲「高砂」に登場する尉と姥を人形であらわしたのが高砂人形である。高砂人形は縁結びや夫婦円満の縁起物とされる。また、尉が手に持つ熊手には「福をかき集める」、姥が手に持つ箒には「邪気を払う」という意味があるともされる。

高砂人形は特に関西では結納に好まれた。高砂人形のように仲睦まじく、共に白髪になるまで長寿を全うできるようにとの願いを込めて、結納品のひとつとして贈られる慣わしだった。

監修 林直輝さん(日本人形文化研究所所長)

参考文献

- 高砂市ホームページ「尉と姥伝説」https://www.city.takasago.lg.jp/soshikikarasagasu/citypromotionshitsu/kanko_tokusan/2_1/3144.html
- 高砂神社公式ホームページ「相生松と尉と姥」<https://takasagojinja.takara-bune.net/banner/pine.html>